

〔驥驢嘶餘〕

一門跡御輿昇八瀬童子也、從闇魔王宮歸ル時、輿ヲ昇タル鬼ノ子孫也、十二人ヲ一結ト

ガテ御輿ノ前ニ行ク也、以上十二人、今ハ御下、行坂輿云也、又遠路ハ輿昇多シ、近所ハ少ナシ、雖

近大臣公卿ハ廿四人、二結モ被召供、下官ハ雖、遠片或一結ビ也、

〔大内家壁書〕條々

一何方へも御出之時、供奉之衆、御中間、御小者、御輿昇以下可被相觸、御禮物已下之事、同當番として相調、御氣色に玄たがひ、供奉衆に渡すべきよし、壁書如件、

文明十八年十一月四日

〔伊勢貞興返答書〕こしかき玄たての事

一十徳を、地をあさぎにそめぬいめには四ツめゆひを付候、十とくのうへに、玄ろき帯をする也、

公方様御こしかき、つかさをとり候物一人は刀をさし、御こしの御さきへ參候也、口傳略○下

〔娶入記〕よめ入の條々

一御こしかきのいでたちやう、同御物もち候にんぶ、いづれも十とくをうへにき候て、其上に玄ろきぬのおびにする也、御こしかき御物もち、いかほども候へ、此ふんにいでたち候べし、

〔愚管抄五〕信西はかさとりて、左衛門尉師光、右衛門尉成景、田中四郎兼光、齋藤右馬允清實を具し

て、人に玄らるまじき夫こしかきにか、れて、大和國の田原と云方へ行て、穴を掘てかき埋れにけり、

〔結城戰場物語〕春王略○中 御風呂よりもあがらせ給へば、こしかきやがて心得て、すぐに道場へ入

たてまつる、

〔三十二番職人歌合〕二十六番 右 輿昇

旅の世のうきをいとほ、輿昇のくるしむみちぞさし合せなる略○中